



TITLE:

京大広報 No. 32

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 32. 京大広報 1970, 32: 131-134

ISSUE DATE:

1970-04-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209663>

RIGHT:

京大広報

No. 32

京都大学広報委員会

昭和45年度入学者選抜 試験合格者について

本年度の学部入学試験実施の結果は、17日に教育、医、18日に経済、薬、19日に文、法、農、20日に理、工の各学部ごとに発表された。学部ごとの合格者数等は下記のとおりである。

合格者最高・最低点等
() 内は女子で内数

学 部	合格者得点		合格発表日時	合格者数	備 考
	最高	最低			
文学部	751	603	19日 14.00	202(33)	募集人員より2名増
教育学部	673	568	17日 10.30	500(1)	
法学部	775	612	19日 14.00	338(5)	8名〃
経済学部	768	610	18日 11.40	220(2)	
理学部	794	622	20日 14.40	281(7)	
医学部	783	656	17日 12.00	101(4)	1名〃
薬学部	773	524	18日 15.30	80(3)	
工学部	808	495.9	20日 14.30	945(2)	
農学部	747	477	19日 15.00	301(2)	1名〃
(計)				2,518(36)	12名〃

(備考) この表は合格発表した時点でまとめたもの。
各学部とも総点は900点満点である。

岡村・上尾・中島教授の日本学 士院賞等の受賞について

原子炉実験所長、工学部高分子化学科併任教授岡村誠三氏は、今回「放射線重合などに関する研究」によって恩賜賞・学士院賞を受賞された。研



究の内容は教授が約30年間にわたって行なわれ、また指導された高分子重合研究の広くかつ独創的な成果であって、乳化重合、カチオン重合あるいは触媒固相重合などを含んだ広い関連研究結果とともに放射線ラジカル重合、放射線イオン重合および放射線固相重合などより成っている。すなわち放射線重合反応がイオン反応として進行し得る条件のあることを世界的に最初に確認した基礎的な成果に始まり、多くの重合反応が固相で進行し得るという特徴を確証し、新しい工業操作としても発展し得るような応用的成果に至るきわめて広範囲のものである。とくに多くの共同研究者とともに行なって得られた成果として今回の受賞は、共同利用研究所の重要性がますます重要視されつつある今日、原子炉実験所としても同慶にたえないところである。(原子炉実験所)

昭和45年度の日本学士院賞受賞者9名のうちに、本学薬学部教授、上尾庄次郎氏が選ばれた。これは同教授の30



余年にわたる「ヒガンバナの有毒塩基成分の化学的研究」の業績に対するものである。同教授は東大薬学科昭和7年卒、当時日本薬学界において独自の発展をと

げつつあった有機天然化合物の構造決定の分野における主流の一つをなしていた故近藤平三郎教授のもとで、昭和10年頃から今日の受賞に輝く研究を開始された。「赤い花なら マンジュシャゲ」と歌にもあるヒガンバナは、秋彼岸頃に、まことに印象的な濃紅色の花を咲かせるが、その鱗茎に含まれるアルカロイドは、種々の観点から世界中の著名な学者の注視的であった。上尾教授は、昭和12年、ヒガンバナアルカロイドの一つ、リコリンの母核が、当時それまでアルカロイドの骨格としては知られていなかったピロロフェナントリジンであることを確定して以来、京大、阪大において、この植物の塩基成分の研究を徹底的に進めて来られ、その16種の塩基のうち、実に14種の構造をことごとく解明された。この間、天然物の構造決定ならびにそれ等の合成に関して、あらゆる最新の手法を縦横に駆使し、リコリン、リコレニン、タゼチン、ガラントミン等の絶対配置を含めての立体構造の確立ならびに、リコラミン、ジヒドロクリニンおよびその立体異性体等の全合成にも成功しており、これの業績は世界的にも有機化学界で高く評価されている。

ちなみに、学士院賞受賞は、本学薬学部において、富田真雄名誉教授について2回目の快挙である。(薬学部)



農学部長中島稔教授が学士院賞を受賞された。受賞の対象となった研究題目は、「環状糖アルコールとそのアミノ誘導体の合成に関する研究」である。環状

糖アルコール類は、いろいろな生理作用と深い関係を持ち、またストレプトマイシン、カナマイシンなどの抗生物質は、いずれもその誘導体であるが、その化学合成はきわめて困難なことであった。教授はその合成に適する新化合物「ベンゼングライコール」を発見、さらに百余種の環状糖アルコールとその誘導体を系統的に合成し、新しい合成化学を開発されたわけであり、その業績は、きわめて独創的なものとして世界的に評価されている。

この度の受賞は、農学部にとって最近の明るい

ニュースであり、学者としての中島学部長の面目躍如たるものがあり、今後ますます教授の御健康と御活躍を期待したい。(農学部)

月 曜 会 メ モ

第52回 (3.23) 司会 四手井綱英会員

はじめに部局からの報告として、基礎研の協議委員会の所内構成員が教官全員に拡大されたこと、薬学部長改選が今回は従前どりの方法で行なわれることに決定したことの報告があったあと、大検委の委員から大検委についての報告として、第1部会では理念についてとりまとめが進行し、4月から部会討議にかけられること、第2部会では将来の教育組織の検討と教養部改革案に対する反応につき討議中であること、第3部会では各担当グループで部会討議資料を作成中であること、総会では井上委員長後任の選挙を行なったが、最後決定は目下保留中であることなどの報告があった。ついで、部局長、評議員などと大検委の委員とを兼任することにつき意見を求められたがこれは個々のケースで判断されるべきで、一般法則は得られないという意見が多かった。

つぎに、本題の研究所の教育参加について討議することになったが、まず霊長研から来年度より大学院修士課程の学生定員がつけられるようになった旨発言があり、これを話題の中心として、大学院と研究所の関係について討論することになった。前回の討論では学部教育への研究所員の参加については幅広い見解が出されたが、積極的参加に対しては反対意見が多く、個人参加は認められても、全体としての参加には多くの疑問があると考えられた。

今回の研究所と大学院の関係についても、多種多様な見解が出され、多数の賛同を得るような結論は見出し得ず、共同利用研、非共同利用研の大学附置の是非、研究所の体制、組織、人事交流などの根本問題にまでさかのぼらないと研究所の大学院問題は解決できないとの意見もあり、現行の大学院のとりえ方が研究所のみならず、学部、学科、さらに部門、講座により著しく違うことが判明した。

次回も引き続きこの問題について討論する予定

である。

今回の質疑応答や意見の主なものと思われるものをあげると次のようである。

1. 霊長研の大学院学生について

- (1) 霊長研に大学院学生をおく理由については若い協力者なしに研究を推進することは不可能であり、共同利用研究者がはいるとしても若い研究者としての大学院生は不可欠で、これ以外に良策はないとの回答であった。
- (2) また、霊長研の大学院の学生を理科学研究科、動物専攻に限った場合、文学、医学などに関する分野の研究に著しい不合理を生じないか、新たに霊長学専攻を設ける意志があるか、遠隔地にある研究所では大学院運営に多くの不便があるのではないかなどの疑問が出され、これらの点については今後慎重に審議してほしいという要望があった。

2. 一般研究所の大学院学生について

- (1) 多くの研究所の大学院学生については、修士課程をどのように考えるかに大きな問題がある。すなわち修士課程を学部教育の延長とみなし、なお広い範囲の専門分野につき教育の必要な課程とするか博士課程同様の専門分野研究の課程とするかによって、修士の課程の学生の取扱いに著しい差があり、前者の場合には修士課程の学生を研究所におくことは困難である。研究所によっては、修士課程の学生をおくという論もある。
- (2) しかし、他方では研究所は学部より一層きめの細い指導ができるので修士課程の学生をおくことは必要であるとの説もある。
- (3) また新制の大学院で、修士・博士を通じて5か年という年月がはたして研究者養成に必須であろうか、もっと短い年期中でも十分に研究者になりうるものもある。誰でも5か年という固定な考え方にも問題がある。
- (4) 修士課程を学部の延長と考えるか、研究の場と考えるかは、分野により人によって異なるのではないか。修士課程の学生は学部学生から研究者への過渡期で、その両方の面をそなえている。
- (5) 非共同利用研と共同利用研の性格、さらに研究所と学部の性格の差、部門と講座の違い

などがはっきりしない。

- (6) また大学という教育の場に付置されている影響もかなり大きい。附置されねば大学院に対する考え方もかなり変わるのではないか。
 - (7) 研究所員が純然たる研究者であっても、若い研究者、後継者の養成を本能的にしたくなるもので学生との接触のないことには一種の淋しさがあるであろう。
 - (8) 研究所に大学院学生が必要なのは、研究所の人事停滞による新人の交流がないことも大いに関係があり、助手と大学院学生との違い、助手の任期制なども併せて討論されるべきであろう。
 - (9) なお学部附置の施設についても研究所と併せ考えるべきであるとの論もあった。
- 今回は総長の臨席があったことを付記しておく。
(四手井綱英会員)

第53回 (3. 30)

司会 高寺貞男会員

今回は恒例の各部局からの報告がなかったため、ただちに前回からの継続議題である研究所の教育参加の問題にはいり、大学院における研究と教育の関係を中心にして具体的な問題の討論にはいった。そして、まず、大学院博士コースの代りに(有給の)研究員制度を設ける方向に研究者の養成制度を改めていってはどうかという、一部会員から出された提案をめぐって、博士コースの院生を有給の研究員へ切り換えた場合、その身分は助手と院生の中間にある準公務員と考えてよいかなどの問題はあるにしても、現実論としては、その方が研究生生活の安定になるばかりではなく、研究者と学生の二重性格からくる「あまえ」をなくし、かつ多くの面で研究意欲が高まるという肯定論が多かった。しかし、それと同時に、大学院博士コースを(有給の)研究員制度へ移行するに当たっては、その前提として、研究員をいかにして選考するか、有給研究員制度に全面的に切り換えると、コース博士はなくなるが、それでよいか、それとも博士コースを残して、並行的に2本だてでゆくかなどを十分に討議すべきであるという付帯意見も出された。

つぎに、優秀な研究者が生れる最適条件からみた大学院におけるスクーリングのあり方が論議さ

れ、それと関連して、現在行なわれている大学院スクーリングの不十分さが指摘されたが、問題は結局研究者をどのようにそだてたらよいのかという点に帰着するので、次回は議題として研究者の養成制度のあり方をとりあげることとなった。

なお、4月上旬は当会の会員が出席する学会が多いので、次回は2週間後の4月13日（月）に繰り延べることが申し合わされた。

（高寺貞男会員）